

中野あじさいの里

満開の様子



● あじさいの里の始まり

毎年あじさいのシーズンになると、「今年の見頃はいつですか？咲き具合はどうですか？」という多数のお問い合わせを頂きます。今では四国中央市の観光スポットとして多くの観光客が訪れているのが、新宮町中野地区の「あじさいの里」です。ここで20年間にわたり継続して行われているのが、あじさい祭りです。

始まりは新宮村時代の昭和50年に、か

ねてより地元住民の念願であった道路が開通したことでした。同時に同地区の主婦の皆さん（中野お茶のみグループ）が、このことに感謝と喜びの想いを込めて道路沿いに、あじさいの苗木を植樹して「あじさいロード」と名付けたのがきっかけです。

● 地元密着型の里づくり

植栽は、その後も毎年道路沿いだけではなく、耕作放棄地にも続けられました。こうして徐々にあじさいの植栽が広がっていくにつれて、休憩所や遊歩道も整備されました。そして、地元住民で作りに上げたあじさい園を守っていくと、平成元年に「中野あじさいグループ」を結成。その翌年には、「第1回あじさい祭り」が開催されたのです。

そこでは、地元の食材を使った漬物な



四国中央市観光交流課
交流政策室

石川 裕美

どの加工品や、あじさいを見ながら食べるという意味で名づけられた、「あじさい見団子」が有名です。観光客に地元の食材を提供することが、生産者の意欲にも繋がっているようです。

● 継続することがメンバーの力に

平成8年には付近の八集落も加わり、「新宮あじさいグループ」として改称。現在に至っています。年間を通しての堆肥管理や下草刈り、道路沿線の清掃、そして、あじさい祭りの開催など様々な作業に追われますが、過疎化の進む地域の中で、「自分たちの手であじさい園を守っていく」という意識を持ち、このことが高齢者の働く意欲と生きがいとなり、ま

た、住民同士のコミュニケーションの場として大きな役割を果たしています。

景観保全の上でも、

当初は500株程だったあじさいが、種類も数も増え約2万株へと広がりました。見頃には色とりどりに咲き誇る姿が美しい山里の風情と重なり、観る人の



あじさい園の手入れ(草刈り)

心を捕らえます。このように住民たちの手で力を合わせて、イベントが継続されていることが評価され、平成8年に「農山漁村高齢者活動部門農林水産大臣表彰」を受賞。このことは、新宮あじさいグループの一層の励みとなりました。

その後も、テレビやラジオをはじめ雑誌などでも取り上げられるなど、各方面へ向けて情報発信がされたことにより、四国内からはもちろん、関西圏からも多くの観光客が訪れるようになりました。そのためイベント当日には、普段は静かな山間の道が、交通量が何倍にも増えてしまい、渋滞がおきるという問題も発生しました。これを緩和できるように、当初は一日のみの開催であったあじさい祭りの期間を一週間に延長し、夜間にもライトアップをすることで昼間とは違う景

色を楽しんでもらうなどの工夫を凝らし、観光客を分散して受け入れられる体制を整えました。メンバーも、この盛況振りには、喜びとともに、驚きを感じているようです。

平成16年4月に2市1町1村での合併が行われ、新宮村から四国中央市新宮町へと変わりました。過疎化の進行している新宮地域にとつ

ては、若者の流出に追い討ちがかかるのではと懸念されました。またこの合併に伴い、中野地区が校区であった寺内小学校が廃校になり、更に寂しさが募つたと思われます。

しかし、あじさいの里は、このような合併の波に押されることなく、四国中央市の観光名所として更に有名になっていきます。平成19年には、「地方自治法施行60周年記念総務大臣表彰」を受け、今年、第20回目の「あじさい祭り」が開催されました。

● 最後に

20年間、途絶えることなくイベントが継続されてきた理由

は、それに関わる住民のチームワークの良さがあつたからだ、会長の大西さんが話されていました。初めは小さな集まりが、中野地区の集まりへ、そして周辺地区も含めた集まりへと組織が拡大しました。それは、あじさい園を守っていくとする住民の熱意があつたからだと思います。

しかし、この20年の間にはメンバーの高齢化等、後継者の確保や人手不足の問題が生じているのも事実です。これから先も美しいあじさい園を保ち、観光スポットとしての役割を継続させることで、交流人口の拡大が図られ、地域の活性化に繋がっていくのです。そのためには、地元の人だけではなく、四国中央市全体で守っていかなければならないと強く感じています。



あじさい祭りの様子(モノレール)